



全国棚田(千枚田)連絡協議会

# 棚田ライステラス

第71号 2016.9.30  
(年2回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒194-0016 東京都小金井市高井戸町145-101

TEL042-386-8355 / FAX042-385-1180

<http://www.yukitaruma.or.jp/tanada/>

## 特集・第22回全国棚田サミット

第22回全国棚田(千枚田)サミット特集  
田を描く日本画家・酒井英次が見た新潟の棚  
【地域文化と棚田⑤】新潟県三条市  
ほか



「棚田現地視察は7月15日の朝8時半にスタート。「岩首棚田コース」のようす



「小鳩千枚田コース」のようす。地元農家が務める棚田ガイド



「北片辺棚田コース」のようす。海を目の前に、アジサイに囲まれた整然とした棚田を歩く



「バスで巡る佐渡の里山里海コース」では、丸山の棚田  
米がおまわされた



「岩首棚田コース」のおもてなしコーナー  
では、地元の手づくり品も販売



「小鳩千枚田コース」のおもてなしでは、  
小豆アイスも登場！



「北片辺棚田コース」「夕鶴の里」として知られる北片辺では、  
おむすびのほか、「夕鶴」の語りも披露された

# 第22回全国棚田(千枚田)サミット開催!

# 平成28年7月14日(木)～15日(金) 新潟県佐渡市にて

## 「棚田の未来予想図」 の実現に向けて

新潟県佐渡市 市長

二浦基裕



### テーマ 棚田には夢がある!

～棚田の価値を知り活かし継承するため～



新潟県立羽茂(はもち)高等学校郷土芸能部による佐渡の伝統芸能。完成度の高さに、会場は大感動。佐渡市立金井小学校5、6年生による合唱「おそらくいないうちに」のメッセージも胸を打った

離島では初めての開催となった「第22回全国棚田(千枚田)サミット」に、全国30都府県より700名もの方々からご参加をいただき、盛会のうちに終了することができましたことを心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

「青々とした初夏の棚田を皆様に見ていただきたい」という思いから、例年の開催時期とは異なり、梅雨時期の開催となりましたが、おかげさまで天候にも恵まれ、参加者皆様にとつて実りの多いサミットになつたのではないかと思います。

さて、今回のサミットでは、棚田の持続可能性をより具体的に高めることを目的に、若者が主体となる「U30(アンダーサーティ)棚田サミット」を初めて開催し、これから棚田の保全・維持を担つていく若者が、棚田の夢を広げ、具体的に今後どのような行動をしていくか意見を活発に出し合い、自らの考えた「棚田の未来予想図」の実現に取り組むことが提案されました。このことは今後、棚田を保全し維持していくために大変重要なことであり、とても有意義な分科会となりました。

また、事例発表や基調講演を踏まえ、各分科会において議論を深めた内容を「共同宣言」としてまとめ、閉会式で採択されました。この「共同宣言」を基に、先ずは参加者一人ひとりができることから実行していくことで、全国の棚田地域における活動が活性化し、発展につながるものと確信しています。

最後に、佐渡は観光の島あります。今回は限られた時間で、ゆっくりと佐渡を満喫していただけなかつたと思ひますので、是非ともゆっくりお時間をとつてあらためて佐渡にお越しいただきますよう心よりお待ちしております。



### 基調講演

#### 「日本を変える里山のチカラ」

(株)日本総合研究所主席研究員

藻谷浩介氏

日本の人団の年代別構成をグラフにし、時代の変容を鮮やかに見せつつ、都市(東京)と佐渡市といつた小さな自治体の未来予想を示した藻谷氏。未来があるのは、油をなく、里山がない。使う都市では、ジャバジャバもつチカラ。そして、ローカルなものを大事にする生き方だと説いた。



### 事例発表

#### 世界農業遺産を通じて考える島の成り立ちとこれから

新潟県立佐渡総合高等学校

「世界農業遺産(GIAHS)」に認定されている佐渡を紹介しながら、将来像を発表した高校生4人。彼らたちの発表とされた声に引き込まれた。トキと寄り添つてきた農業(棚田)があるからこそ、芸能も生まれ、地域がつくられ、本当の豊かさがここにあると発表し

### 開催プログラム

#### 1日目:平成28年7月14日(木)

- ◆オープニング・開会式
- ◆事例発表:新潟県立佐渡総合高等学校
- ◆基調講演:(株)日本総合研究所主席研究員 藻谷浩介氏
- ◆分科会 第1分科会:棚田には米がある!  
第2分科会:棚田には命がある!  
第3分科会:棚田には温がある!
- ◆棚田のまもりびとミーティング
- ◆首長会議
- ◆U30棚田サミット
- ◆全体交流会

#### 2日目:平成28年7月15日(金)

- ◆棚田現地視察:岩首棚田コース/北片邊棚田コース/  
小倉千枚田コース/バスで巡る佐渡の里山里海コース
- ◆分科会まとめ
- ◆閉会式

# 棚田には命がある

## 第22回 全国棚田(千枚田)サミット

棚田には夢がある! ~棚田の価値を知り・活かし・継承するために~



○座長：板垣 徹氏(株)JAファーム佐渡 代表取締役社長

○コメンテーター：齊藤真一郎氏(佐渡農家、佐渡トキの田んぼを守る会)

○パネリスト：金子真人氏(株)金子商店 専務取締役

坂本孝明氏(農事組合法人 達者農産)

山本 亮氏(輪島市地域おこし協力隊)

西山京子氏(料理研究家)

このような、棚田米の  
リピーターが棚田の風景  
を支える仕組みを、各地  
で構築していくことを確  
認した分科会でした。

ナーチャー制度を含めて、消費者との結びつきを強めること、⑤プロ農業者として、食味品質の確保は大事。棚田米は文句なくおいしいのだが、その条件をきちんと管理すること。リピーターを獲得するには、「棚田」だけではなく、「うまい」も必要なのです。

棚田米は、その苦労に見合うだけの価値があるのか、それはどんな価値なのか、その価値は、米を食べる側である消費者に果たしてつながっているのか、また、どう伝えるのがいいのか、というのが私たちに与えられた課題でした。米穀店を経営しお米マイスターとして活躍の金子さん、料理研究家で人気ブロガーの西山さん、能登の里山で地域おこし協力隊員として活躍する山本さん、地元佐渡の海岸地帯で生産組織を立ち上げた坂本さんという多彩なパネリストの皆さんに語っていただき、コメントテーザーとして佐渡トキの田んぼを守る会代表の斎藤さんは、ご自分の実践を踏まえて議論の整理をお願いしました。フロアからも、棚田米のおいしさについてやオ

棚田米は、その苦労に見合うだけの価値があるのか、それはどんな価値なのか、その価値は、米を食べる側である消費者に果たしてつながっているのか、また、どう伝えるのがいいのか、というのが私たちに与えられた課題でした。

ナーチャー制度の現状など積極的に発言いただけました。それらの論議を通して確認したことは、次のようなことでした。

①棚田の風景や棚田米には、今日の日本社会にとって失ってはならないかけがえのない価値があること、②その価値を消費者に伝えるために積極的な情報発信が必要であること、特にネットで、動画も含めて、生き生きとした情報を継続的に発信し続けることが効果的であること、リーフレットはきちんと更新すること、③消費者、特に子どもに来てもらい、現場に立つて風景を見せてもらうことでファンをつくる取り組みが重要であること、④棚田支援の強力なツールであるオーナーチャー制度を含めて、消費者との結びつきを強めること、⑤プロ農業者として、食味品質の確保は大事。棚田米は文句なくおいしいのだが、その条件をきちんと管理すること。リピーターを獲得するには、「棚田」だけではなく、「うまい」も必要ななのです。

ナーチャー制度の現状など積極的に発言いただけました。それらの論議を通して確認したことは、次のようなことでした。

①棚田の風景や棚田米には、今日の日本社会にとって失ってはならないかけがえのない価値があること、②その価値を消費者に伝えるために積極的な情報発信が必要であること、特にネットで、動画も含めて、生き生きとした情報を継続的に発信し続けること、③消費者、特に子どもに来てもらい、現場に立つて風景を見せてもらうことでファンをつくる取り組みが重要であること、④棚田支援の強力なツールであるオーナーチャー制度を含めて、消費者との結びつきを強めること、⑤プロ農業者として、食味品質の確保は大事。棚田米は文句なくおいしいのだが、その条件をきちんと管理すること。リピーターを獲得するには、「棚田」だけではなく、「うまい」も必要なのです。

座長：株JAファーム佐渡 代表取締役社長 板垣 徹

## 棚田米リピーターが棚田の風景を支える仕組みを

座長：新潟大学 研究推進機構 朱鷺・自然再生学研究センター准教授 豊田光世

## 夢のある挑戦が棚田のさらなる価値に

第2分科会のテーマは「命」。私たちの

存在の根本にあるものだ。棚田は、生きることや成長すること、どのようにつながっているのだろうか。命を支える大地を未来につなぐために、私たちに何ができるのだろうか。棚田を通しての学びを追求する4名のパネリストの取り組みを手がかりに、これらの問い合わせについて考えた。

棚田米を通して保育園の食育を進める大野広幸氏は、「お米は美味しい」という原体験を大切に、栄養士や職員も巻き込みながら、皆で棚田の価値を再発見する機会を作っている。一方、若者の教育に尽力する竹田和夫氏は、多様な専攻の大學生とともに、棚田地域を発展させる方策を考え、提案の可能性を現場で検討する機会を作っている。棚田から生まれる学びの形は多彩である。

ただし、人から押し付けられた学びは、長続きしない。能登での里山マイスター養成をもとに、フイリピン・イフガオの棚田地域で人材育成に取り組む中村浩二氏は、地域の人びと目標を立て、アプローチを模索するプロセスが重要なと語った。

分科会の終盤、「棚田の耕作は、つらくて、きつくて、危険」と、参加者の女性が、悲痛な思いをこぼした。不利な条件にある農地だから、増収や維持管理の継続が悩みといつて現実的課題も示された。それでも棚田を継承しようと試みるのは、なぜ

なのだろうか。

本間太郎氏は「百姓は目標をもつて挑戦し続ける存在だ」と語る。難しいからこそ、安全な米作りに徹底的にこだわり、挑戦する。そして、挑戦する姿勢があれば、不利な条件でも大きな成果を生むことができるのではないかという。米作りで生き方を学ぶ。コメンテーターの佐々木邦基氏も、まずは自分の子どもたちに夢追う姿を見せていただきたいと語った。

夢をもつことから挑戦は始まる。夢のある挑戦は、人びとの共感を呼び起こし、やがて連携や協働を生み出しえる。課題があるということは、夢を描く可能性があるということ。そんな風に考えたら、棚田のさらなる価値が見えてきた。



○座長：豊田光世氏(新潟大学 研究推進機構 朱鷺・自然再生学研究センター准教授)

○コメンテーター：佐々木邦基氏((一社)佐渡生きもの語り研究所副理事長)

○パネリスト：中村浩二氏(金沢大学名誉教授、里山里海プロジェクト代表)

本間太郎氏(海利用研究会、農家、漁業者)

大野広幸氏(社会福祉法人未来保育会理事長 ふじみ保育園園長)

竹田和夫氏(県立新発田高等学校教諭、棚田学会理事)

2 棚田には命がある!

# 棚田には温がある!



- 座長：森山明能氏((株)御祓川シニアコーディネーター)  
 ○コメンテーター：南雲純子氏(元佐渡市観光戦略官)  
 ○パネリスト：多田寛子氏(春蘭の宿、農家民宿「春蘭の宿」女将)  
 連河健仁氏(NPO法人DREAM ISLAND副理事長)  
 齋藤倫子氏(岩首集落在住者)  
 千田倫子氏(鼓童文化財団、NPO法人佐渡芸能伝承機構副理事長)

第3分科会では、棚田の米でも生物多样性でもない「第3の価値」に焦点を当てた。最終的にサミット共同宣言の一文として、「私たちは、過去から受け継いできた棚田地域の環境とコミュニティを次世代につなぐため、外部との交流を通じて、自分たちが誇りと楽しみを持てる地域資源の発掘・発信に努めます」という内容をまとめた。今後棚田地域で意識すべき①目的、②方針論、③努力行動指針を示したわけだが、この一文に至るまでの議論を少し紹介したい。

まず、どんな地域にも資源はある。ましてや棚田には豊富にある。問題は資源を、活用できる資源!!地域資源に変えて

いるかだ。地域資源として発掘するためには、外部との交流を積極的に図り、それ 자체を楽しみとしながら継続していくことが重要であるとされた。

さらに、その外部交流のプロセスの中で、「文化的誇り」や「楽しさ」が棚田地域の子供たちに伝えられていることも報告された。棚田地域の環境資源と社会関係資源（コミュニティ）を次の時代に繋げるきっかけも外部交流に起因することを示唆している。勿論その際経済的な資本も必要であるが、先ずはしっかりと地域の「光」を育むこと。それがしっかりとできれば、「光」も活発化していき、経済的資本も蓄積されるという議論であった。

最後に、今回の分科会の本質は斎藤氏が指摘してくれた気がしている。彼女は自分が幼い頃からこそ、その楽しさを自分の子供たちにも感じてもらいたい故郷・岩首を好きになつてもらいたいと。

この「楽しいから好きになる」という単純な一言にこそ、地域づくりの大重要な部分が集約されていると感じた。「楽しいから好きになる」が時間（世代）と空間（集落内だけでなく外部の人も）を超えて行く時、本物の光がそこに生まれ、棚田の第3の価値が最大化すると思うからである。

## 外部交流プロセスの楽しさが棚田を次世代に繋ぐ

座長：株式会社 御祓川シニアコーディネーター 森山明能

座長：早稲田大学名誉教授・NPO法人棚田ネットワーク代表 中島峰広

なかしま

## 東日本の17団体が3組に分かれ議論

恒例となつた保存会の意見交換会は、本年度「まもりびとミーティング」の名で開催された。今回は、東日本（東北・関東・信越・東海）を中心とした保存会28団体に呼びかけ、17団体の参加を得た。これを棚田オーナー制の実施状況や地域的バランスなどを考慮し、A、B、Cの3つのグループに分け議論を進めることにした。

まず、グループでの議論を進める前に、各組からNPO法人である1団体を選び、話題提供をしてもらうことにした。

A組の新潟県十日町市地域おこし実行委員会からは、絶滅集落になるのは時間の問題といわれた池谷集落が国際NPOのJENとの交流、地域おこし協力隊員や新しいイターン者の定着などにより奇跡の集落といわれるほどに変貌を遂げたこと。

B組の岐阜県恵那市坂折棚田保存会からは棚田オーナー制を基盤とした取り組みを発展させ、取り組みの多様化と事業化を目指していること。

C組の奈良県明日香の未来を創る会からは、高知県梼原町に次ぐ歴史を持つ棚田オーナー制がマンネリ化、沈滞化に陥ったため、活動の範囲を飛鳥川流域全体に広げ、新たな活動を模索していることなどが報告された。

その後のグループでの議論では、A組が組織におけるリーダーの育成、運営資金の獲得方法、棚田米販売については安

定的な販売先の確保、ブランドの確立、小口にするなど販売方法の工夫の必要性などが論じられた。

B組では、取り組みの担い手としては若者よりも退職後のシニア世代をターゲットにするのが有効的であること、取り組みではボランティア活動から脱却し、事業化が必要なことが論じられた。



- 座長：中島峰広氏(NPO法人棚田ネットワーク代表)

## 棚田保全活動団体による意見交換

# 「外貨獲得に向けた取り組み・ルールづくり」、 「学校教育を通じた人材育成」の2テーマで

## 「学校教育を通じた人材育成」の2テーマで

座長：棚田学会会長

**せんが  
千賀裕太郎**

首長会議は、農林水産省地域振興課の島田篤行課長補佐、中村弘志係長のご臨席を得て、1県16市町村の首長らから「外貨獲得に向けた取り組み・ルールづくり」、「学校教育を通じた人材育成」の2テーマに関する報告を受け、質疑が活発に行われた。

「外資獲得」に関する報告からは、棚田等の里山景観や棚田米をはじめとした身近な安全・安心の農作物に好意を持ち、「お金を払ってでも棚田地域を支援したい」と「オーナー」制度や「棚田バンク」

制度に積極的に参加する都市民の増加がうかがわれ、大地の芸術祭、案山子コンテスト、地元酒造会社と組んで「廃校」で酒造を行う例、韓国からの来訪者と高校生が田植交流を楽しむ例など、参加者からの興味深い「外貨獲得」に向けた事例報告が相次いだ。

また、棚田地域で高齢化が進行するなか、「学校教育を通じた人材育成」の取り組みも進んでおり、小学校内で児童が米の栽培をしている例、小学校児童の農業高校生の指導による棚田での体験学習、J A主催による「子ども農学校」での体験学習など

名前は「U30」ですが、20歳～40歳くらいまでの全国の若手農家、地域おこし協力隊の棚田班、自治体担当者、保全団体のメンバーなどが対象で、全員参加型の討論会で「棚田の夢を語り合いたい」というコンセプトで募集を開始しました。最初は人数が集まるか心配ましたが、事前募集で30名程度の申し込みがあり、若手の会議らしきあらかじめFacebook上でグループを作り、自己紹介と「棚田がこんな場所であってもいいと思う」をテーマに提案書き込んでもらいました。当日は、さらに参加者や見学者が増え、会場は満員。

タードしました。Facebook上で貰ったさまざま意見をもとに座長が「日常の場」「学びの場」「イベント交流の場」という3つのカテゴリーを提案し、参加者にマッチングしてもらいながら、若者が棚田で活動する上での特性を踏まえた3つのバランスが大切であるとの結論を導き出しました。これはサミットの共同宣言にもそのまま採用され、閉会式で発表されました。

なにしろすべてが初めての試みで課題もたくさん残りましたが、棚田の未来を盛り上げて行く上では画期的な出来事となつたのではないか。形や名称が変わつても、棚田に関わる若者が集まって繋がれる場が、次のサミットにも引き継がれることを切に願います。



○座長：千賀裕太郎氏(棚田学会会長)



地域への愛着と農業への理解を深めるうえで、とても見が共感を集めた。

基調講演を終えたばかりの藻谷浩介さんもコメントーターとして駆けつけ、賑やかな雰囲気の中ス

# 棚田サミット初の若手会議を開催！

座長：NPO法人 棚田ネットワーク事務局 高桑智雄



○座長：高桑智雄氏(NPO法人棚田ネットワーク事務局長)  
○コメンテーター：藻谷浩介氏(講師/株日本総合研究所 主席研究員)

棚田の未来を具現化する

写真提供：佐渡市

# 岩首棚田で、維持の大変さを痛感！

大分県別府市 内成棚田の会 川島千明



1：小学生による見送り：『そらまめ』展望小屋付近から、「まだ来てね～」と見送りをする小学生たち

昨年初めて棚田サミットに参加し、今年も佐渡市での棚田サミットに参加することにしました。現地視察では、棚田の中を実際に歩くことができ、内成棚田に環境や規模が少しでも似ている地域をと思い、「岩首棚田コース」を選びました。

送迎バスに揺られて約1時間、集落のある海沿いに到着すると、地元住民と小学5年生の女の子がバスに同乗し、地元の小学生が作成した手作りパンフレットを基に岩首棚田について説明を聞いていると間もなくして、到着。

バスを降り、展望小屋である『空のまめら』(通称『そらまめ』)まで歩きながら田を見ていると、畦畔のあまりの高さ（傾斜）に驚き、草刈りは足元に注意しながら慎重に行うという話を聞き、棚田の維持の大変さを目の当たりにしました。

10分程歩くと、『そらまめ』に到着し、地元の小学生が歓迎のメッセージカードとおにぎりを渡してくれました

2：バス車内の説明：手作りのパンフレットをもとに、岩首棚田について説明する小学生のガイド  
3：地元小学生によるあもてなし：地元の小学生がメッセージカードとおにぎりを渡してくれました  
4：綺麗に草刈りされた畦畔：傾斜を間近で見るとあまりの高さに驚きます

田米のあじぎりと共にとてもなしてくれました。一生懸命に歓迎の言葉を言う姿が可愛らしく、『そらまめ』から見える棚田の景色と共に気持ちが和らぎました。

岩首棚田で一番小さな田は約1・8m<sup>2</sup>（約18株）だそうです。一番小さい田を直接見ることはできませんでしたが、大きさを想像しながらも、内成棚田にも畠2畠ほどの田があることを思い出しました。

岩首棚田でも後継者が不足しているそうですが、機械が入らないような田が少しでも減少していくかないよう願うばかりで、岩首の棚田景観に癒されながらも棚田の維持の大変さを目の当たりにして現地視察を終えました。



# 荒地から復活した小倉千枚田へ

長崎県 県央振興局土地改良課 技師 安達綾香



小倉千枚田と小倉ダム



棚田米のあむすび

来年は9月28日(木)  
29日(金)に長崎県東彼杵郡波佐見町で開催されます。皆様のお越しを波佐見町鬼木棚田でお待ちしております！

次回開催地である長崎県より参加させていただきました。小雨降る中、先行きを心配しながらもアジサイが美しく咲く長谷寺の散策で心癒され、千枚田へ。地元の方から「耕作放棄が進み小倉千枚田は荒地となっていたが、小倉ダムの完成に伴つて田の整備を再開することになり千枚田が復活した」というお話を伺いました。丸太で作られた階段を登り千枚田を見下ろすと、景観の美しさに感動！そして面積の広さに驚き、この広大な荒地を復活させた地域の人々の技術に感銘を受けました。一枚一枚のほ場幅は2mほどとかなり狭く

枚田が復活した」というお話を伺いました。丸太で作られた階段を登り千枚田を見下ろすと、景観の美しさに感動！そして面積の広さに驚き、この広大な荒地を復活させた地域の人々の技術に感銘を受けました。一枚一枚のほ場幅は2mほどとかなり狭く

棚田見学後に地元の方々から棚田米を作つたあむすびとお茶、小豆アイスをいただきました。前日の分科会での「正直農業はきついけれど、おいしいと言つてくれる人がいるから頑張ることができる」という農家の方の言葉を思い出しながら、そして日の前に広がる千枚田を眺めながらいたたいたあむすびは絶品でした。



長谷寺とアジサイ

長谷寺本堂

棚田現地視察

「北片辺棚田」コース

北片辺にて、おもてなしの心を感じて  
えりゆうじ

心配していたお天気も、雨は降らず。右は当日現地担当の元協力隊の岩崎さん



#### アジサイが特徴的な棚田



お世話になっている和歌山県庁の職員さん(左)もご来島。一緒に案内をしていただきました!!

最後はお姉さま方のお見送りです

あにぎりとあ茶のあもてなし～

今回、私は「準農民」として「北片辺棚田コース」に参加させていただきました。と言いますのも、大学の半期間を使いまして、この4月から孫ターンで佐渡にある父親の実家に住んであります。棚田は私にとって身近なものでして、3年前に和歌山県で全国棚田サミットをきっかけに発足しました棚田保全の学生団体「棚田ふあむ」に所属しております。大学に入学してからは、月に一度ほど有田川町で活動をしています。北片辺は佐渡の北部にあり、島内に住んでいてもなかなか行かないような場所に位置しております。(→)の棚田を見て一番初めは「ほ場整備されていて、海が見えるきれいな田んぼ」という印象を受けました。2反歩ほどのがいぐつもあり、形もきれいな四角形で機械も入れるようでした。大学で活動しているような和歌山県の山間部では、さらに急などり

が多いため、北丘辺  
のようなきれいに整備された棚田はほとんど  
ないかもしれません。しかし、そのようにきれいに整備された田んぼでも、斜面の草を刈る量を考えてみると、やはり平地の田んぼとは異なる  
「棚田」と云ふことを再確認することができた。  
また、その斜面にはといひうらアヅサ  
イが植えられており、時期が良かつたのか私たちを出迎えてくれて、こんな感じを感じました。  
地元のお姉ちゃん方が握つてくださったおにぎりもおいしくいただき、最後は手を振つてのお見送り。おもてなしの心を感じ、また行きたい地域です。

和歌山大学観光学部3年

江龍田崇大

今回、私は「準農民」として「北片辺棚田コース」に参加させていただきました。

が多いため、北岸辺  
のようなきれいに整  
備された棚田はほと

10

この度、当市の棚田農家の方や関係者の方とサミットへ出席し、現地視察でこじかみのコースに参加させていただきました。

島ならではの、里海の資源を活用した海洋深層水について学

100

この度、当市の棚田農家の方や関係者の方とサミットへ出席し、現地視察でこちらのコースに参加させていただきました。まず、急峻な傾斜に広がる小倉千枚田を一望できる場所へ向かいました。そちらにじかつて耕作放棄が進み、観光資源としての価値がなくなりつつあった棚田を復活させたお話を伺いました。様々な方の熱い想いが込められ、復活を遂げたというお話に深く感銘を受けました。

また、遠くから見る小倉千枚田は圧巻の

島ならではの里山の資源を活用した海  
洋深層水について学  
べせていただだきほし  
た。

A photograph of a woman with long brown hair, wearing a black and white horizontally striped shirt. She is sitting in a field with green grass and hills in the background. The photo is taken from the waist up.

**佐渡ならではの棚田の取り組み**

新潟県二条市経済部営業戦略室 主事 山田綾美



美しい景観が広がる小倉千枚田



本物にあづかとい  
いじわらしだ。



上：トキと共に生する丸山地区の棚田  
左：丸山地区の棚田のお米は絶品でした

# 竹本久一さん

長崎市 大中尾棚田保全組合会長  
(長崎県長崎市在住)

今年も佐渡市へ全国からたくさんの方々が参加され、皆さん方との温かい交流を深め、いろいろな想い出を残しながら長崎市大中尾へ帰郷いたしました。

私は、棚田を守る全国の方々の熱い思いは、これから日本の農業を支える大きな原動力となることを確信しております。

今、日本は、物の豊かさで農業に対する関心が薄くなっていますが、あと長くしないうちに、土で育った栄養面の高い農産物が必ず都会の人から目を向けるときがきてあります。

汗を流しながらのよいしい米づくりはとても楽しみです。4家族(子ども3人と孫たち)で1年中、自分で一生懸命耕作した新米を食べさせることは、苦労も吹っ飛び、これからも命の限り、米づくりに精を出していきたいです。

大中尾棚田も高齢化が加速し、その維持にとても苦労しております。よい知恵があったら教えてください。これからもよろしくお願いします。



写真左が竹本さん。同じ大中尾棚田保全組合役員の  
帶山安敏さんと一緒に交流会会場にて



1人で北片辺の棚田コースに参加中の渡辺さん。  
77歳の輝く女性でした

佐渡に住みながらも北片辺の棚田には来たことがなかったものですから、いい機会でした。来たかったんですよ。第3分科会の農家民宿「春蘭の宿」女将、多田さんの話も聞きたくて、参加したんです。

安心安全な食を求めて、消費者協会で活動しています。現地のほ場を見に行ったり、勉強会に参加したりね。(談)

## 渡辺典子さん

佐渡市消費者協会役員  
(新潟県佐渡市在住)



## 泉 晶子さん

棚田学会会員 (東京都小金井市在住)

佐渡になぜ「トキ」なのか? 素朴な疑問に対して地元の高校生が明確に応えてくれました。オープニングの芸能発表・事例発表でのことです。地域を深く学ぶことで、郷土文化・棚田の価値を知り、くらしに生きようとする生徒たちの姿には夢があり、未来の広がりを感じることができました。

来年の開催地は長崎県波佐見町、その次が長野県小谷(おたり)村です。平成30年度の開催地となる私たちは、今回のサミットに村長以下15人の視察団で参加しました。

長野県の最北端に位置する小谷村は、北アルプス山麓の豊かな自然に囲まれた日本有数の豪雪地帯です。村の水田のほとんどが棚田であり、水路や畦普請は幾世代にもわたる共同作業の積み重ねで築いてきた歴史があります。この小さな村で大きなサミットを成功させることができたら、こんなうれしいことはありません。

サミット開催をきっかけに「村民参加型村づくり」がまた一步前進できると確信しています。新たな交流が生まれることを期待しながら、再来年の再会を楽しみにお待ちしています。

## 曾根原恵子さん

長野県 小谷村会議員  
(長野県小谷村在住)



も た に

## 藻谷浩介さん

基調講演講師・U30棚田サミット  
コメントーター  
(株)日本総合研究所主席研究員

徳島県上勝町から、初めて棚田サミットに参加しました。何より驚いたのは、参加者の多さと多様さでした。棚田を取り巻く大きなエネルギーを感じました。

会場では棚田の保全に関わる方とたくさんお話を聞いていただき、上勝町でも参考になるアイデアをたくさんいただきました。

また、自分が現在取り組んでいる、石積みを修復する「石積み学校」について、たくさんの方に興味を持っていただき、このサミットで出会った方々と協力して石積みの修復活動を広げていければと思います。



## 金子玲大さん

徳島県上勝町地域おこし協力隊・  
石積み学校 (徳島県上勝町在住)



写真左が曾根原恵子さん。右は、小谷村から参加した、長野県農村生活マイスター協会会長の藤原万里子さん



昨年の第21回全国棚田(千枚田)サミットには、たくさんの方から参加いただき、お陰をもちまして無事終了することができました。天候にも恵まれ、実りある2日間で現地見学では、たくさんの方が棚田を見に来てください、有り難うございました。棚田ウォーキングでは組合員も一緒に参加して、皆様方と交流できたことがたいへん良かったと言っておりました。

今回の第22回佐渡のサミットでは、たくさんの方と交流ができ、千枚田見学では、手入れがむずかしい田もあり、機械をどのようにして入れていくのか、たいへんさを感じました。オーナー制度を利用されており、私たちも勉強していくかなればと思いました。

## 松本正弘さん

玄海町 浜野浦棚田保全組合長  
(佐賀県玄海町在住)



今回第22回棚田サミットには、能登米生産者、棚田米生産者、JA関係者、県市関係者と22名で参加させていただきました。他県の世界農業遺産(GIAHS)認定地域をはじめ、多くの方と触れ合うことができ、また沢山の方々の故郷愛と熱意を感じました。

それぞれの地域に伝わる食・文化・風土があるけれど、能登、七尾市にも沢山の地域資源、新鮮な海の幸・豊富な山の恵み、そして数多くの祭礼があり、今後ますます住んでいる私たちが継承し守っていきたいと感じました。

「能登はやさしや土までも…」輝く宝石箱の能登を大切にしたいと思います。



地域おこし協力隊になって初めての棚田サミット。今まで棚田の「た」の字も意識していなかった私にとって、棚田に関わる方々が一堂に会するこのイベントは、カルチャーショックそのものでした。私の住む内子町の「泉谷棚田」はこぢんまりとした秘境です。清らかな湧水から作られる棚田米はおいしく、耕作者の人となりを感じられます。ぜひ訪れて、泉谷棚田に流れる時間を味わってみてください。

木島 茜さん 内子町地域おこし協力隊 御祓地区担当  
(愛媛県内子町在住)

私は十日町市の地域おこし協力隊として地元生産者と共に参加しました。第1分科会の「棚田をどのように外部に発信するか」という話の中で、生産者の棚田を守りたいという強い姿勢や情熱が伝わることが消費者を惹きつけ、現地に赴いて棚田を感じてもらうことで新たな価値が生まれると感じました。今回の経験を担当地区の取り組みに反映させ、本質的な田んぼの価値を外部に発信できるような流れをつくりたいです。

安藤直人さん 十日町市地域おこし協力隊 飛渡地区担当  
(新潟県十日町市在住)



本間小百合さん  
十日町市地域おこし協力隊  
飛渡地区担当  
(新潟県十日町市在住)

ついでに 佐渡のゆるキャラ、サドッキーと筑城さん

筑城まゆみさん 七尾市産業部里山里海振興課  
産業調整室 専門員  
(石川県七尾市在住)

このたびは、棚田サミットに参加する機会をいただき、ありがとうございました。

30歳以下の分科会は実に勉強になりました。彼らの感じている、自分で食べる米を自分で作る充実感と、何百年も続いてきた村里を自分たちが受け継がねば誰が受け継ぐ!という使命感。他方で、耕作とイベントで働きき放しの現実を前に「何かおかしい」という違和感。その通りです。棚田は、都会のブラック企業にサヨナラした若者が、人間らしい暮らしを取り戻せる場所でなくてはなりません。夕方以降と休日は自然をゆっくり楽しめる暮らしに向か、若い人の工夫にこそ期待したいのです。

基調講演では、口先評論家商売の私が偉そうにクイズなどするものですから、客席の大先輩の中には、「あの態度は何だ」とご不快の向きもありました。そのくらいの自尊心と反骨心がなければ、とても棚田は守ってこられなかっただでしょう。失礼いたしました。ですがやっぱり、時代は変わり世代は交代します。テレビ番組の張本のように、旧世代を代表して文句はいいつつも、どうかいチローや大谷のような若者の、これまでの枠を超えた挑戦を許してくださいね!

皆様が守っている棚田が、百年先、千年先に、「日本の宝」として世界に知られるようになっていることを確信しています。

2016年4月より十日町市飛渡地区の地域おこし協力隊として活動し、お米のブランディング、情報発信を行っている。東京での資本主義に振り回されている自分に、地方に答えがあると感じ協力隊としてなったのだが、「日本を変える里山のチカラ」と題した、藻谷さんの講演で「東京だけが栄えるのはよくない」とか、酒飲みながら言ってんじゃないの?」という一言が突き刺さった。それは、「事実」から基づく「答え」だったから。いわゆる勉強不足を痛感した。

勉強不足を勉強したサミットになってしまったが、棚田に対するあらゆるテーマを学べたので、「事実」の知識を深め、「実践」に還元していきたい。

# 棚田を描く日本画家

酒井英次が見た

## 新潟の棚田

て、新潟市在住の日本画家、酒井英次さんが棚田を描くようになつて、約20年。酒井さんが持つ淡いタッチとやわらかな色調が新潟の棚田の美しさをより際立たせます。これまで描いてきた新潟の棚田の中から10カ所をご紹介します。

(絵・紹介文..酒井英次)



「岩首 春耕図」(佐渡市岩首) 146×224cm 2007年

岩首の昇竜棚田、約30ha。地形に沿った曲線を残す整備を行った。海の見える棚田としてガイド付き見学も行われている。



「生椿 春耕秋收図」

(佐渡市新穂生椿) 146×112cm 2006年

かつてトキと共に暮らした農家・高野毅さんが町から通い、耕作を続けています。

「小倉 千枚田図」

(佐渡市小倉) 112×146cm 2007年

江戸期、相川金山の人口増による食糧増産で慶安3(1650)年開墾がはじまる。最盛期(昭和)には、約5haに達した。その後、約1/10になったが、2008年よりオーナー制度導入により、約50%が復元された。



「みのりの図」

(三条市北五百川) 91×61cm 2000年

巨大岩山、八木ヶ鼻の東側に位置する。棚田百選地。約9.5ha。

「見倉 結束 春耕秋收図」(津南町結束、見倉) 146×244cm 2014年

秋山郷にある結束の棚田は、新潟では唯一と言ってよい石積みの田。約12ha。結束と見倉を巡るハイキングコースもある。



そね 「曾根 春耕図」(十日町市浦田曾根) 61×91cm 2008年

浦田から新田へ登る道筋に開田当時の形を残す、約50枚の田がある。80歳代の農家・久保田さんが耕作を行っている。

とうげ 「峠 春耕秋收図」

(十日町市松代星峠) 112×292cm 2004年

約30ha、約200枚。夜明けに霧が出、雲海になることもあり、今や写真を撮る人や絵を描く人のメッカになっている。



ひれい すもん 「比礼と守門」(長岡市栃尾比礼) 122×146cm 2008年

守門岳(1537m)を望む。春には守門岳に牛形の雪形(\*)が出現し、春耕の時を告げる。\*残雪や雪の消えた山肌が動物などの形となり、それを見て農耕の準備等を行う目安とした(農事暦)



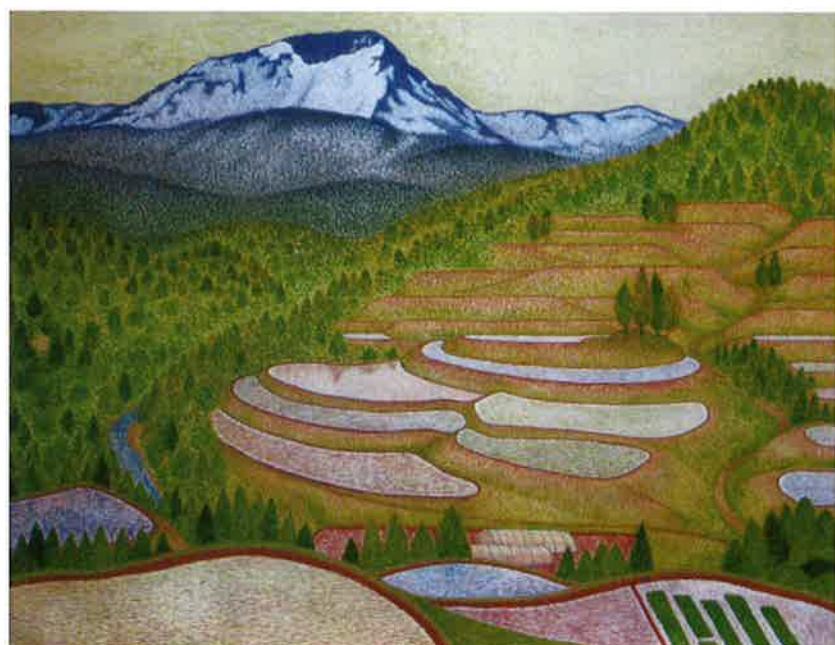
なかのまた 「中ノ俣 春秋図」(上越市中ノ俣角間)

61×91cm 2010年

約1.5haの開墾時の形をほぼ残す田。NPO法人かみえちご山里ファン俱楽部が「棚田学校」というオーナー制度を行って13年目。地元の郷土芸能、行事の復活やサポート、古民家再生・活用、森林管理等も行う。



さかい・えいじ：1941年新潟市生まれ。1971年よりグループ展、企画展等に出品。棚田をはじめ、民俗の風景を描き、1997年第1回個展を新潟市で開催。以後、新潟市、東京、佐渡市などで個展を開催し、まもなく第10回を数える。全国棚田(千枚田)連絡協議会、棚田学会、棚田ネットワーク、国際雪形研究会、各々の会員。2013年棚田学会賞受賞。画集に『酒井英次絵画集 民俗の風景へ40年の78点』



「馬形の見える棚田」(上越市安塚区信濃坂) 112×146cm 2000年

奥には長野県との境となる菱ヶ岳(1,129m)が見える。春先に馬の雪形が出現し、農耕の時を教える。約7.6ha。

# 北五百川の棚田と地域をデザインする力

新潟県三条市

取材・文 石井里津子



## 棚田空間は「オレの庭」

「ここをね、オレの庭だつて考

えているんですよ。棚田をどう

デザインしようかと考える。こ

の東屋を建てたりね。ここ一帯

のサクラの木も植えたよ。ヒメ

ユリは自生していたものを増や

してね。このあいだは彼岸花の

球根を200個買って、道沿い

に植えてね。そう、景観をデザインして

いるんですよ」

農家の佐野誠五さん

(昭和23年生)の言



新潟県三条市(\*1)

北五百川集落、棚田

農家の佐野誠五さん

(昭和23年生)

の言

葉が新鮮だった。棚田空間を

「デザインする」——戦後生ま

れの棚田農家は、こんな発想を

するのか、と目からウロコが落

ちるような気がした。

北五百川の棚田を見ていると、

いや、昔から日本人はこうした

感覚(センス)を持つていたの

ではないか。農村空間にこまや

かに手を入れ、そこに暮らすこ

とで幸福感を見いだしていたの

ではないか、ともよぎる。

ちなみに、佐野さんはこの地

に根付いて15代目。

「棚田も家も約400年だね。

棚田の耕作は、たいへんだから

ね。きれいごとじや続けられな

い。自分たちの田んぼだからやる

んだよ」

ここ「北五百川の棚田」は、

日本の棚田百選の一つ。上越新

幹線・燕三条駅から車で30~40

分ほど東南に進む。日本海を背

にし、信濃川が生んだ越後平野

の広がりを見つつ、「金物のまち」

として名高い三条市の市街地へ。

そこから五十嵐川に沿って、旧

下田村へ入っていく。そのまま

五十嵐川を遡れば、福島県境と

なる。

途中、五十嵐川の支流、北五

百川沿いへ入る。北五百川集落

は、標高1293mの粟ヶ岳の

麓にある。標高は150mほど。

集落全体で平坦な田んぼも含め

れば、約40ha。かつては130

きは「棚田オーナー」

きは「棚田オーナー」

カタクリの群生。4月はカタ

クリ。5~6月はヒメサツーリ

花周囲には、サクラやアジ

サイなども植えられ、四季を

通じて花が楽しめる。(写真提供

供:三栄建設部営業戦略室

3..佐野誠五さんの名刺の肩書き

戸、現在77戸の集落だという。

百選認定のエリアは、集落全体の斜面に及び、約9.5ha。整備事業が入り、四角く整えられた場所もある。

その中でとくに美しい景観を誇るのが、佐野さんを中心に4人の耕作者が営む1.5haの空間だ。ここは、カタクリやヒメ

サユリなど、季節ごとの花と棚田の饗宴が美しく、大勢が足を運んでくる。

また佐野さんは、春秋、都市部の子どもたちや三条市職員の新人研修といった農作業体験も受け入れ、冬はスノーシュートレッキングをこの棚田で楽しんでもらっている。

最も、北五百川の棚田に人が訪れるのが4月。カタクリの群生が目当てだ。ちょうど、春の日差しのなか、残雪で輝く粟ヶ岳を背に薄紫色のカタクリが咲き誇り、年々口コミで人が集まるようになった。毎年、花が咲くわずかなシーズンに1000人を超す人が来るという。

カタクリが群生しはじめたのは、佐野さんのある行為がきっかけだった。

「オレね、39年前、子どもが生れたときに、子どものために

何か残してやろうと、家や田ん

ぼの周りの雑木を1000本以上、たつた1人で切り倒した。

辺りを鬱蒼とさせていた雑木



## 「かじこ」が育んだ景観美

「昭和30年代までは、ここは、どの家も炭焼きをやつてたね。木を切り尽くして粟ヶ岳の中腹まで、全部伐採してたね。標高1293mだからね。棚田の周

りにも木はなかつた。きれいなもんよ」

この炭焼き。「金物のまち」で

ある三条の鍛冶屋が使うための

東屋も花の球根も木の苗も佐野さんの自腹。そんな佐野さんを知って、スイセンの球根の提供もあった。「3年前ぐらいから、サルが球根の味を覚えてねえ。食べられて、ばあです。ヒメサユリも球根100個が全部ネズミに食われたり。イノシシにもやられるね」と佐野さん。苦労は絶えない

1: 1200年の歴史を持つ八木神社の宮司の石澤功さん。八木神社は市指定文化財  
2: 墓勝・八木ヶ鼻、石澤宮司によると、この絶壁の岩は550万～600万年前、海底火山が爆発し、溶岩が盛り上がりでできたと近年わかったという。高さ200m幅400m。ハヤブサの繁殖地として県天然記念物に指定されており、石澤さんは自らが撮影した幼鳥の写真を見せてくれた



ものだつた。炭の中でも「かじこ」と呼ばれる野焼きのもの。「ここのはね、炭といつても釜で焼くんじやない。その場で野焼き。直径10cm、長さも親指ぐらいあればいい炭。焼くと自然と小さくなる。それをわらで編んだ炭俵に入れて、背負つて降りて、旧三条の町に出した。今はもう誰もやらないね。いい炭じやないし、顔中真っ黒になるし。鍛冶屋も石油やコークスに変えて使わなくなつたしね」だが、辺りの山々に手が入り、美しい空間を成り立たせていた風景の記憶は、佐野さんにはあつた。だからこそ、生い茂る雜木をばつさり1000本以上切り、眺めを整える大仕事が成し遂げ

られたのだろう。20年くらい前には、小高い丘も削つたという。だが、その子どもに、後を繼げとは言えない。高価な農機具を購入するだけの利益は、もはや米からは得られない時代になつた。佐野さんは現在、3世代で暮らしている。

佐野さん宅前でちょうど休日  
で在宅だった娘婿さんに会った。  
「自分がここに(婿に)来たとき  
には、ちつとも人が来るような場所  
所じやなかつたんです。なのに、  
すごい人が集まる場所になつた。  
観光地になつて車が渋滞して。  
(義父の)ここまで持つていく工  
ネルギーがすごいですよ。いや  
あ、プレッシャーですね(笑)

五十嵐川を利用して

支流の北五百川を下り、五十嵐川へ移動した。五十嵐川沿いに突如盛り上がった断崖絶壁がそびえ立っている。景勝「八木ヶ鼻」である。その足元に1200年の歴史を持つ八木神社が鎮座していた。樹齢600年という巨大な杉が建ち並ぶ。

宮司の石澤功さんに地域の歴史をお聞きすることができた。その中で、五十嵐川での舟運の

「川を利用して舟で、炭(かじ)を旧三条の町の鍛冶屋に出して  
いたんです。炭は油紙で包んだんですね。川の水しぶきを避け  
るためです。

## 五十嵐川の、荒沢という場所に

荷問屋がありました。ほかに舟着き場はあつたかもしませんが、昔の台帳に、荒沢の記録が残っています。舟で旧三条の町まで下り、帰りは舟を引つ張って上がつてくる。その道が五十嵐川沿いにあります。

ほかにも薪が重要な産物でした。薪や柴も舟便を用いたようですが、川流しといえば、何といつても材木。川幅が狭い上流からは一本ずつ流し、八木ヶ鼻の下の淀んだ淵で筏を組み、川を下りました。町で売り、櫂棒とロープを担いで歩いて帰つてきたんですね。

不安定な舟便から馬車に変わり、やがてオート三輪や貨物自動車が主役になりました

五十嵐川があつたからこそ、川の力で炭(かじこ)をはじめ、山の産物を町へと運べたのである。こうした営みの繰り返しが、北五百川集落の美しい景観を育んできました。

「どこの山肌も散髪後のように美しく、その景観は旧三条の人々に夢を与えた」と石澤さんが教えてくれた。

五十嵐川があつたからこそ、川の力で炭(かじこ)をはじめ、山の産物を町へと運べたのである。こうした嘗みの繰り返しが、北五百川集落の美しい景観を育んできた。

荷問屋がありました。ほかに舟着き場はあつたかもしませんが、昔の台帳に、荒沢の記録が残っています。舟で旧三条の町まで下り、帰りは舟を引っ張つて上がつてくる。その道が五十嵐川沿いにあります。

ほかにも薪が重要な産物でした。薪や柴も舟便を用いたようですが、川流しといえば、何といつても材木。川幅が狭い上流からは一本ずつ流し、八木ヶ鼻の下の淀んだ淵で筏を組み、川を下りました。町で売り、櫂棒とロープを担いで歩いて帰つてきたんですね。

不安定な舟便から馬車に変わり、やがてオート三輪や貨物自転車が主役になりました

「体感バス」(\*2)など、インフラツーリズムにも力を入れている。ダムカレーもそんな流れで生まれた一品だ。

ここで、地域おこし協力隊員の棚山愛香さんに会えた。

「Uターンです。埼玉の方に7年半出ていて、制度を利用して帰つてきました。ここは人が面白いんです。棚田の佐野さんもステキでしよう。面白い人がたくさんいるから、帰つてきて良かったです」

棚山さんの笑顔に送られ、旧下田村をさらに移動する。ながらかな丘陵地に建つコンクリートの洒落た建物が目に入ってきた。背後に、広大な緑のフィールドが見える。

「ここは世界的にも有名なアウトドアブランド会社の本社です。旧三条市内で起業した会社なんですが、2011年にキャンプフィールドを併設させ、ここに移転してこられたんですよ」

案内をしてくれていた三条市経済部営業戦略室の山田綾美さんが言う。

自分たちを包む自然環境を生き方の一つとして「デザイン」する感性がここにもあつた。

自分たちの暮らしを取り巻く環境を「オレの庭」ととらえ、まるでガーデニングを楽しむかのような感性が、地元を面白くしている。地域に人のアイデアがあふれ、面白くなくちゃ、人はやつてこない。そう改めて教えられて、三条市を後にした。



三条ボーグがドンと乗った大谷ダムカレー。八木ヶ鼻温泉「いい湯らしい」のレストランではもう一つあるダムにちなんだ「笠堀ダムカレー」が食べられる。



地域おこし協力隊員、粉山愛香さん。この日はちょうど人手が足りないと、農家レストランへ手伝いに来つていら

三条市・人口約10万人。平成17年に三条市、栄町、下田村が合併。八十里越・三条市（旧下田村）から福島県只見町に至る山道が「八十里越」と呼ばれています。実際の距離は八里だが、あまりいひこねえよ（一里が八里にも感じられたということからつけられた名）。戊辰戦争の際に長岡藩の家老が会津へと逃れるため、傷を負った体でこの地を越えたことが知られています。現代の「八十里越」である国道289号線を福島県只見町まで貫通させる工事が続いている



アウトドアブランド、スノーピーク本社。5万坪のキャンプ場が広がる。  
写真提供:(株)スノーピーク

# 全国棚田(千枚田)連絡協議会会長が交代します

本年度全国棚田(千枚田)連絡

協議会の会長に就任いたしました

た、佐賀県玄海町長の岸本英雄

と申します。皆様のご支援、ご協力を賜りながら会の運営に当たつて参りたいと思います

ので、よろしくお願ひ致します。

昨年の第21回全国棚田(千枚田)サミットは、10月23日・24日に「共につたえよう美しく

豊かな棚田へふるさとを未来へつなぐ」をテーマに当町を会場として開催し、全国各地か

ら多くの皆様にお越しいただき、盛会のうちに終了することができました。改めて多くの関係者

の皆様方に感謝申し上げます。

また、本年7月14日・15日には、「棚田には夢がある!~棚田の価値を知り・活かし・継承するための~」をテーマに、離島での初開催となる新潟県佐渡市において第22回棚田サミットが開催されました。美しい棚田の風景とともに、

情報交換や交流を通じ、棚田の価値を再認識することができたのではないかと思います。

当協議会におきましては、棚田の本当のありがたさを広く日本国民に知って頂けるよう、引き続き努力していくなければならぬと感じているところでございます。

終わりに、熊本地方の早期の震災復興を願うとともに、当協議会のさらなる発展と会員の皆様のご健勝、ご活躍を祈念いたします、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

平成27年度全国棚田(千枚田)  
連絡協議会の会長を仰せつか  
り、微力ながらその任を務めさ  
せていただきました。1年間、会員の皆様には様々な形でご支援とご協力を賜りましたこ  
とに、この場を借りて厚く御礼を申しあげます。

さて、会長に就いてからの1年間を振り返りますと、昨年10月には「浜野浦の棚田」に

代表される、玄界灘に面し、青い海と緑豊かな田園風景の広がる佐賀県玄海町において、  
第21回全国棚田(千枚田)サミットが開催され、実行委員長でありました岸本玄海町長はじめ実

行委員会の皆様や、佐賀県、玄海町の方々におかれましては大変なご苦労があつたものと思いますが、盛会のうちに

終了することができましたのも関係各位のご尽力の賜物と、改めて感謝を申し上げます。

今後につきましても、新たに会長となります岸本玄海町長のもと、これまで以上に連携を密にしながら更なる活動の推進が図られ、棚田の多面的機能と役割の見直しや、農村地域の活性化への機運がなお一層高まりますことを願っております。

結びに、全国棚田(千枚田)連絡協議会のますますのご発展と、会員の皆様のなお一層のご活躍を心よりご祈念申し上げ、退任の挨拶といたします。

会長に就任します

岸本  
英雄

佐賀県玄海町 町長

「第22回全国棚田(千枚田)サミット」は、「棚田には夢がある!~棚田の価値を知り・活かし・継承するための~」をテーマとし、初の離島、新潟県佐渡市で7月14・15日の日程で開催されました。

サミット期間中は、当協議会全国各地から棚田に熱い思いを抱く多くの皆さまにご参加をいただき、盛會のうちに終了することができました。これもひとえに、三浦市長はじめ佐渡市実行委員会や地元、関係機関・団体の皆さまのご尽力の賜物であり、この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

さて、当協議会では、サミット前日夕方、本年度第1回の理事会、翌14日サミット開会前の午前中、総会を開催し、前年度の事業経過報告並びに収支決算報告、本年度の事業計画並びに収支予算について可決承認をいただきました。

また、次年度以降のサミット開催地につきましては、来年第23回開催地・長崎県波佐見町、第24回開催地・長野県小谷村に続き、第25回サミット開催地は、山口県長門市(本年6月サミット開催に向けた請願書を提出)に正式決定されました。

総会不参加の会員の皆さまに会員はもとより、全国各地から棚田に熱い思いを抱く多くの皆さまにご参加をいただき、盛會のうちに終了することができました。これもひとえに、三浦市長はじめ佐渡市実行委員会や地元、関係機関・団体の皆さまのご尽力の賜物であり、この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

さて、当協議会では、サミット前日夕方、本年度第1回の理事会、翌14日サミット開会前の午前中、総会を開催し、前年度の事業経過報告並びに収支決算報告、本年度の事業計画並びに収支予算について可決承認をいただきました。

また、次年度以降のサミット開催地につきましては、来年第23回開催地・長崎県波佐見町、第24回開催地・長野県小谷村に続き、第25回サミット開催地は、山口県長門市(本年6月サミット開催に向けた請願書を提出)に正式決定されました。





「棚田へ行こう！」は第12回全国棚田サミットの宮崎県日南市で誕生した



栃木県茂木町で開催された第13回全国棚田サミットで披露された「棚田へ行こう！」

Topics

## 『棚田へ行こう！』誕生10周年

—Sing Out Kid's 代表 鈴木康子さんへの手紙—

長野県小谷村／全国棚田(千枚田)連絡協議会個人正会員 吉田 忠文

\*『棚田へ行こう！』の楽譜は1冊500円、CD『ぼくの町で生まれた歌』は1500円。

\*連絡先：シングアウトキッズ  
代表・鈴木康子  
(TEL : 080-1706-2017)  
E-mail:yasukosing@gmail.com



「棚田へ行こう！」が誕生して10年。当時の子どもたちもステージに集まつた。いまや大学生や、夢を叶えてアナウンサーや医療系に就職した子も、もうすぐお母さんになる子も



8月11日、シングアウトキッズ12周年記念コンサート。写真はすべて鈴木康子さん提供



2006年、日南市の棚田サミット会場での一枚。『棚田へ行こう！』はこのメンバーから生まれた

翌年の栃木県茂木町サミットから『棚田へ行こう！』は公式ソングとなりました。『ぼくの町で生まれた歌』も印象的でしたよ。ふるさとや棚田を愛する子どもらの歌声が、いかに多くの人々の心に響くかを痛感。さっそく楽譜とCDをお願いしたら、冒頭のうれしいメッセージが添えられていきました。

日南市との共催で8月11日に開催された「一緒に歌えば友だち笑顔あふれるふるさとコンサート」(シングアウトキッズ結成12周年記念イベント)も盛況でよかったです。会場の国際交流センター小村記念館を埋めた県内ファンの手拍子も絶えなかつたとか。

おりキッズの練習はこれからですが、「ホタル舞う北アルプスの山里・新田毎の月の小谷サミット」も応援してください。

佐賀県玄海町で昨秋行われた全国棚田(千枚田)連絡協議会総会で、長野県小谷村が第24回サミットの舞台に選ばれました。信州では、松尾芭蕉の「田毎の月」で知られる姨捨棚田(更埴市)現在千曲市)以来、21年ぶりの開催となります。玄海町サミットでは、あおば・ふたば保育園児による『棚田へ行こう！』のオーブニングに改めて感動。この歌は、シングアウトキッズが生まれて3年目、宮崎県日南市の坂元棚田で行われた第12回サミット・チームソングとして発表されたオリジナル曲でしたね。キッズのメンバー全員で、全国から訪れるみなさんへ「おもてなし」として作詞・作曲されましたと伺いました。

翌年の栃木県茂木町サミットから『棚田へ行こう！』は公式ソングとなりました。『ぼくの町で生まれた歌』も印象的でしたよ。ふるさとや棚田を愛する子どもらの歌声が、いかに多くの人々の心に響くかを痛感。さっそく楽譜とCDをお願いしたら、冒頭のうれしいメッセージが添えられていきました。

日南市との共催で8月11日に開催された「一緒に歌えば友だち笑顔あふれるふるさとコンサート」(シングアウトキッズ結成12周年記念イベント)も盛況でよかったです。会場の国際交流センター小村記念館を埋めた県内ファンの手拍子も絶えなかつたとか。

おりキッズの練習はこれからですが、「ホタル舞う北アルプスの山里・新田毎の月の小谷サミット」も応援してください。

「ふるみどりの棚田が大好きといつ気持ちをこめて歌えば、きっと素敵な歌声になりますよ！遠い長野のお友だちに日南よりエールを送ります！」

会員募集中

新しく会員になったみなさま

<団体会員>稻倉の棚田保全委員会(長野県上田市)

<個人賛助会員>菊池稚奈(福岡県福岡市)

川口恵美(東京都江東区)

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

玄海町役場 産業振興課

〒847-1421 佐賀県東松浦郡玄海町大字諸浦348番地

TEL:(0955)52-2199

FAX:(0955)52-3041

ホームページ:バックナンバーをすべて掲載

全国棚田(千枚田)連絡協議会

検索

## 編集後記

7月という、例年とは異なる季節での全国棚田サミットが新潟県佐渡市で開催されました。手入れの行き届いたあぜに、稲の緑。それらが海に映え、美しかったこと。佐渡市のみなさま、たいへんお世話になりました。ありがとうございました。若い方を積極的に取り込んだ棚田サミットは、若者たちの笑顔であふれていました。彼らが、棚田や農村に惹かれ、その魅力や価値をさらに掘り起こしてくれています。それも全国各地で。そんな彼らに棚田の価値や活動を伝えている全国棚田サミットの意義も感じ取った次第でした。

さてこの季節、災害も心配です。今年4月の熊本地震、8月は台風10号豪雨など、被害にあわれた方々にお見舞いを申し上げます。日本各地で被害の傷跡が生々しいなか、次々と迫り来る災害ですが、復興への底力がこの国にはまだあると勇気ももらいます。どうぞ、みなさまお気を付けてお過ごしください。

石井里津子



閉会式の壇上で、長崎県波佐見町が次回開催をアピール!



閉会式にて、第22回の佐渡市から第23回の波佐見町へバトンタッチ



長崎県波佐見町 鬼木棚田協議会 会長  
川平定昭さん

近年、農家の高齢化や少子化、後継者不足などにより耕作放棄地が増加しております。しかし、棚田のおいしい米を食べたい、そう思う人は少なくないと思います。佐渡サミットには、棚田のおいしい米を食べさせたいと思っている大勢の方が参加されたのではないでしょうか。急斜面の中に皆さんが苦労して耕作しておられる事に感激いたしました。また、芸能文化にも力を入れ、それを高校生の皆さんがしっかりと伝承している姿を目の当たりにして涙が出るほど感動いたしました。

おもてなしにつきましても、郷土料理を沢山いただき、ごちそうになりありがとうございました。

さて、平成29年度、全国棚田(千枚田)サミットは、長崎県波佐見町で開催されます。陶と農の町、波佐見町の棚田は石垣を基本としており、先人が造った景観を今も残す素晴らしい所です。また、案山子も皆さんをお待ちしております。ぜひ波佐見に“こんねえ！”（⇒「来ませんか」の意味）

## 第23回全国棚田サミットは 長崎県波佐見町で！

平成29年  
9月28日(木)  
~29日(金)



鬼木の棚田



鬼木棚田まつりには、ユニークな案山子がいっぱい。シンクロ案山子も田んぼの中に

キーワードは“陶と農”波佐見らしいサミットに

長崎県波佐見町 農林課

石橋万里子

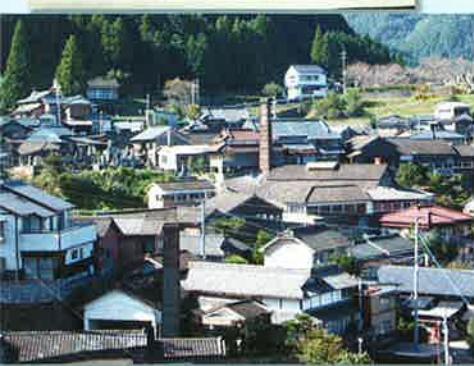
一生に一度のチャンスと思って上陸した佐渡島！

見事な佐渡民謡と息の合った踊りは観客の心を掴む。ふと、佐渡には何をしにきたのかと忘れさせてしまうくらい見事な郷土芸能発表で佐渡サミットは開幕した。歴史と文化を引き継ぐ島の証明である。普段から棚田も大事に守られて、人も育てられていると感じさせる素敵なものだったと振り返る。

さて、「陶農の郷」と呼ばれる波佐見町は稲作を中心とした農業のほかに、庶民の生活に根ざした陶磁器の産地として発展してきた。どちらも地味な作業の積み重ねから成果が誕生する。近年、スローフードなど「食」が見直されているが、コツコツ作った本物の「食と器」が体を健康に・心を豊かにしてくれる信じている。

波佐見サミットは平成29年9月28・29日で開催する。黄金色の稲穂が眩しく、ユニークな案山子が登場する季節である。毎年秋分の日に開催する「鬼木棚田まつり」は来年で18回目を迎える。波佐見町を代表するイベントに成長した。きっかけは「日本の棚田百選」に認定されたことだった。時事ネタ満載の案山子で棚田は笑いに包まれる。美しい棚田だけでは物足りない。リピーターを獲得するためには、棚田+αが必要であり、それは伝統や文化、そこに集う人々で加味されていく。現地見学コースには賑わいのある棚田や江戸時代から発展してきた日用食器の製造過程を取り入れ、波佐見らしさを感じていただきたい。

人口1万5千人の小さな町では豪奢なふるまいはできないが、わが町でできる最高のもてなしの気持ちでお迎えしたい。



棚田のある鬼木の隣は、陶磁器(波佐見焼)の郷、中尾山



1日目の交流会会場にて

甲戌29年9月28日(木)・29日(金)  
全国棚田(千枚田)サミット